

Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】 Charlotte Brontë, the Governess, and the Governess Novel

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 成田,美鈴, 横山,茂雄, 宮川,清司, 竹内,康浩, 山辺,規子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1720

氏名(本籍)	成田美鈴 (山形県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博論第128号
学位授与年月日	平成17年4月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当 人間文化研究科
論文題目	Charlotte Brontë, the Governess, and the Governess Novel (シャーロット・ブロンテ作品研究 -19世紀ガヴァネス小説との比較を中心に-)
論文審査委員	(委員長) 教授 横山茂雄 教授 宮川清司 助教授 竹内康浩 教授 山辺規子

論文内容の要旨

本論文は、19世紀英国に誕生したガヴァネス(女性家庭教師)小説というジャンルに注目し、このジャンルに属する作品群と Charlotte Brontë の作品に描かれたガヴァネス像やガヴァネスに関する様々なテーマを比較することにより、Brontë の作品を新たな視点から読み直そうとする試みである。

序論は、ガヴァネス小説、及び、このジャンルと Brontë の作品の関係をめぐる先行研究を概観した上で、その問題点を別出、ガヴァネス小説というジャンルの再定義を試みている。

全体としては第1部 'Governess in Fiction and Non-Fiction' (第1章-2章)、第2部 'Charlotte Brontë and the Governess Novel' (第3章-7章)の2部から構成されており、前者は19世紀英国の現実社会におけるガヴァネス、及び、ガヴァネス小説全般を扱い、後者では、ガヴァネス小説のコンテキストにおいて Brontë の作品が論じられる。

第1章 'Real and Fictional Governess' は、19世紀英国において、ガヴァネスと呼ばれる女性家庭教師の存在に大きな社会的関心が寄せられていたことに着目し、それが虚構世界におけるガヴァネス描写にどのように反映されていたかの検証をおこなう。当時の新聞や雑誌、書物を渉猟し、ガヴァネス問題が現実社会において如何に論じられていたかを具体的に示した上で、それらがガヴァネス小説におけるガヴァネス描写とどのような関連性があったのかが考察される。その結果、ガヴァネス小説が描く苦難に満ちたガヴァネス生活は現実に密着したものであることが明らかにされている。また、

ガヴァネスは中産階級女性の理想像を自ら率先して生徒に示すように期待されており、これと同じガヴァネス像が小説においても典型的であることが示されている。

第2章 ‘The History of the Governess Novel from the 1740s to the 1860s’ では、ガヴァネス小説というジャンルに焦点をあて、その歴史を18世紀中旬から19世紀中旬まで詳しく考察し、同ジャンルの様々なコンヴェンションの定着と変遷を探っている。19世紀初頭にはもっぱら児童文学の領域にあったガヴァネス文学が、1830年代から1840年代にかけて大人のための小説へと移行していく経緯が示され、冷酷で思慮のない雇用者とは対照的な道徳的に優れたガヴァネス像が頻繁に登場することが指摘される。同時に、この時期のガヴァネス小説がヒロインを強い信仰心によって支えられた自己犠牲的な人物として設定、宗教色を強めていく事実が明らかにされる。そして、こういったコンヴェンションのなかで、Brontë の *Jane Eyre* (1847) の占める位置が定位されている。

第3章 ‘The Rebellious Governess and New Domesticity : *Jane Eyre* and the Governess Novel(1)’ は、*Jane Eyre* におけるガヴァネス像が、従来のガヴァネス小説が好んで描いた中産階級女性の模範像としてのガヴァネス像と如何に大きく異なっていたか、同時代の教育的要素の多いガヴァネス小説と比較することで検証する。まず、主人公 Jane が激しい感情を持ち、活動を欲する人間としての権利を主張している点に注目した結果、従来のガヴァネス小説には見られない、人間らしさを前面に出したガヴァネス像を提示していることを明らかにしている。さらに、*Jane Eyre* における結婚が、遺産相続やジェントルマンとの結婚というガヴァネス小説のコンヴェンションを踏襲する側面をもちながらも、本質的には Jane の人間性を守るために機能しており、その点では、従来のコンヴェンションを大きく逸脱していると結論づけられている。

第4章 ‘Jane’s Integrity as a Religious Governess : *Jane Eyre* and the Governess Novel(2)’ は、ガヴァネス小説全般の宗教的要素という観点から *Jane Eyre* を論ずる。とりわけ Jane の信仰心が神の直接的な啓示に依拠する点に着目し、Brontë は、*Jane Eyre* という作品において Barbara Hofland の *Ellen, the Teacher* (1814)、Rachel McCrindell の *The English Governess* (1844) などのガヴァネス小説の宗教的コンヴェンションを取り入れながらも、Jane の宗教的立場と St. John のその双方の正しさを同時に擁護しているとの結論が導かれている。

第5章 ‘*Shirley* and Governesses’ Plight’ では、考察の対象を *Jane Eyre* から *Shirley* (1849) へと移し、作者 Brontë 自身がガヴァネスであったという伝記的事実に着目しながら、当時の一大社会問題であったガヴァネス問題に対する作者の関心がどのように作品内に反映されているかを論ずる。まず、登場人物のひとり Mrs. Pryor がガヴァネスとして惨めな生活を送った過去をもつという設定に注目し、ガヴァネスに対する雇い主側の思いやりの欠如が強調されているなどの要素を別出していく。その上で、ガヴァネス時代の Charlotte Brontë の伝記的事実を詳しく検証、*Shirley* におけるガヴァネス問題の扱いは作家自身のガヴァネス経験に由来していることを明らかにしている。さら

に、ガヴァネスを辞めて作家となってからの Brontë のガヴァネスに関する発言に見られる矛盾を指摘して、逆にその矛盾にこそ Brontë のガヴァネス問題に対する細心な配慮が看取でき、それが *Shirley* という作品にも反映していると結論づけている。

第6章 'Foreignness and the Governess: *Villette* and the Governess Novel(1)' では、*Villette* (1853) の主人公 Lucy Snowe が、本国イギリスから大陸へ渡ったのち、カトリック圏の異国で如何に対処していくかという問題を、外国におけるガヴァネスを描いたガヴァネス小説と比較対照して考察する。まず、海外でガヴァネスになった女性たちを描いたガヴァネス小説、Sarah Mary Fitton の *How I Became a Governess* などの内容を詳細に吟味し、こういった作品群では、基本的に、主人公は英国人としての優越性を強く主張し、カトリックの信仰が英国の宗教的風土には相容れないものとして拒絶されていることを指摘する。これを踏まえた上で、*Villette* が、カトリックの信仰を拒絶している点では他のガヴァネス小説と異ならないが、英国人ガヴァネスとカトリック教徒の男性と結婚の約束を描いている点で、きわめて特殊な例であることを明らかにしている。

第7章 'The Governess and Providence: *Villette* and the Governess Novel(2)' では、*Villette* が、その宗教的要素において如何に特異であるかを、他のガヴァネス小説、とりわけ、その providence というテーマの扱い方と較べることによって論じる。主人公が幸せな結婚を遂げることのない *Villette* は、ガヴァネスの苦難は後に必ず報われるというガヴァネス小説のコンヴェンションから大きく逸脱していることを指摘、いっぽうで、Harriet Martineau の *Deerbrook* (1839) との比較検討を通じて、Brontë が、主人公 Lucy の苦難に満ちた生涯を神の意思に沿うものであると描きつつ、同時に個人的な人間同士の愛をきわめて重視しているとの解釈が導きだされている。

以上のような19世紀英国のガヴァネス小説という観点から Brontë の作品を考察するとき、Brontë の小説家としての革新性があらわになってくる。*Jane Eyre* では中産階級女性の理想像が覆され、*Shirley* では、ガヴァネスの自己犠牲を奨励するのではなく、それを当然のように考える社会の風潮に異議が唱えられる。そして、*Villette* では、報いの得られない世界で信仰心のあるガヴァネスがどのように生きるのかを大胆に描いている。Brontë の小説は、19世紀ガヴァネス小説の主要なコンヴェンションを踏襲しつつも、そのジャンルに密着していた価値観そのものを実は覆しているというのが本論文の結論である。

論文審査の結果の要旨

19世紀英国を代表する小説家のひとり、Charlotte Brontë の作品が、ガヴァネス（女性家庭教師）小説というマイナーなジャンルに影響を受けていた事実は夙に指摘されてきたところであるが、ガヴァネス小説全般に関する研究は英米でもいまだ少数にとどまり、さらに、同ジャンルと Brontë の作品との関係に焦点を絞った本格的な研究はほとんど存在していないというのが現状である。本論文は、British Library、Bodleian Library など英国の僅か数カ所の図書館にしか収蔵されていないガヴァネス小説についておこなわれた精緻な調査研究に基づいており、ガヴァネス小説の様々なコンヴェンションを詳細に分析するとともに、この観点から Charlotte Brontë の作品を読み直そうとする意欲的な試みである。

序論における、ガヴァネス小説をめぐる先行研究の概観は過不足なくおこなわれており、従来の研究に看取できる問題点の剔出作業も的確だといえよう。しかし、Jerome Beaty に部分的に依拠しつつ著者自身が試みているガヴァネス小説というジャンルの再定義には曖昧さ、矛盾もみられ、今後のさらなる考察を望みたい。

第1部 ‘Governess in Fiction and Non-Fiction’（第1章－2章）は19世紀英国の現実社会におけるガヴァネス、及び、ガヴァネス小説全般を扱っている。

第1章 ‘Real and Fictional Governess’ は、19世紀英国におけるガヴァネスに対する関心を、当時の論説、統計類とガヴァネス小説の双方に探っている。ガヴァネスになる女性たちの出身階級、その職業を選んだ理由、あるいは、平均賃金や仕事の内容などについての検証は手堅く、ガヴァネス小説におけるガヴァネス像が現実を如実に反映しているとの結論は説得力をもつ。ただし、ガヴァネス小説の読者層、流通部数などへの目配りが欠落しているのは惜まれるところである。

第2章 ‘The History of the Governess Novel from the 1740s to the 1860s’ では、先行研究を踏まえて、ガヴァネス小説というジャンルの歴史と展開を考察し、同ジャンルの様々なコンヴェンションを分析している。とりわけ、この時期のガヴァネス小説に敬虔で自己を犠牲とするのを厭わぬ人物がヒロインとして頻出、宗教色を強めていくとの指摘は、ガヴァネス小説群の丹念な調査に基づくだけに、注目に価いするといえよう。

第2部 ‘Charlotte Brontë and the Governess Novel’（第3章－7章）では、ガヴァネス小説という観点から Brontë の作品の新たな解釈が試みられており、本論文の中核を成す。

第3章 ‘The Rebellious Governess and New Domesticity: *Jane Eyre* and the Governess Novel(1)’ は、*Jane Eyre* の主人公でガヴァネスとなる Jane が、従来のガヴァネス小説に登場する

ガヴァネス像と大きく隔たっている事実を明らかにしている。Janeが当時の中産階級の一般的な価値観に反逆している点で特異だとする見解は創見とは呼べないが、ガヴァネス小説群との詳細な比較検討に拠っている点については画期的であり、高く評価できる。いっぽう、JaneとRochesterの結婚が、遺産相続その他の要素においてガヴァネス小説のコンヴェンションを踏まえながらも、中産階級女性に期待される生き方への報奨として機能していないという点で本質的にコンヴェンションから逸脱するとの結論は、はなはだ洞察に富むといえる。

第4章 ‘Jane’s Integrity as a Religious Governess: *Jane Eyre* and the Governess Novel(2)’ は、著者が「宗教的ガヴァネス小説」と分類する作品群との比較を通じて、*Jane Eyre*の宗教的側面を扱う。とりわけ、St. Johnの提示する宗教観に対するJaneの反応、及び、結末のFerndeanにおけるJaneの信仰心が論じられている。解釈作業がテキストに終始密着したかたちでおこなわれているところは評価できるものの、著者の議論がいささか明確さを欠いているのは残念である。また、JaneはRochesterとの結婚そのものが神の意思に沿った結果であることを認識、神が是認する結婚におけるRochesterとの生活の充実に関心を注ぐことによって信仰心を表しているとの結論は説得力に富むとはいえず、今後の再検討を望みたい。

第5章 ‘*Shirley* and Governesses’ Plight’ では、作者Brontë自身がその実生活においてガヴァネス体験があった事実を念頭において、ガヴァネス問題に対する作者の関心がどのように反映されているかという観点から、*Shirley*という作品を解釈しようと試みている。登場人物のCarolineやMrs. Pryorが直面するガヴァネス問題、あるいは未婚の独身女性という問題を分析しつつ、ガヴァネス時代と作家時代双方のBrontëの書簡などを細かに検証してBrontëのガヴァネス問題に対する一見したところ矛盾した発言を剔出していく作業は、地味ではあるが堅実なものと評価できる。なお、本章のみならず、全体を通じて*The Professor*への言及がほとんどないのは、この作品がBrontë自身のガヴァネス体験を考察するうえで重要と思われるので、残念である。

第6章 ‘Foreignness and the Governess: *Villette* and the Governess Novel(1)’ では、Brontëの全作品のなかでもっとも難解なものである*Villette*を、ガヴァネス小説の文脈という観点から読み直すという作業を試みている。異国に赴いたガヴァネスを描いたガヴァネス小説じたいがそもそも広く知られていないうえに、それらと*Villette*との比較をおこなった研究はほぼ皆無に近いので、著者の試みはきわめて貴重なものといえよう。また、この章において、著者が海外におけるガヴァネスという問題を現実と虚構の両面から考察、ガヴァネス小説のみならず、イギリスから国外へ出たガヴァネスの遺した自伝までを渉猟しているのは高く評価できる。こういった細心な研究の結果として、Brontëの描き出す主人公Lucyのカトリック圏の異国における行動が、如何なる点で特異であるのかが十分な説得力をもって示されているといえよう。

第7章 ‘The Governess and Providence: *Villette* and the Governess Novel(2)’ でも*Villette*

が引き続いて論じられているが、ここで主眼となるのはその宗教的要素である。とりわけ providence というテーマに焦点を絞って他のガヴァネス小説群との比較考察がなされるが、このテーマを論じるのはキリスト教に関する深い知識が要求されるだけに、著者の議論も十全には掘り下げられていない憾みが残る。いっぽうで、Brontëとも親交のあった女流作家 Harriet Martineau の *Deerbrook* との比較に限るならば、この作品にあっても、ガヴァネス以外の登場人物に結婚という幸運が訪れ、そこにガヴァネスが神の恩寵を見出すと指摘、*Villette* と共通する点を明らかにしたのは、創見といえるだろう。

本論文は、英国での徹底した一次資料の調査を基盤として構築された労作である。先に述べたように、英米においても、ガヴァネス小説というジャンルと Brontë の作品との関係に焦点を絞った本格的な研究はほとんど存在しておらず、Brontë の作品が如何にガヴァネス小説の主要なコンヴェンションを踏襲しつつ同時に逸脱しているかを豊富な資料から明らかにした本論文は高く評価されるべきだろう。

著者の研究方法は、空疎な議論に陥ることなく、あくまで原資料に依拠する丹念なものである。このきわめて手堅い手法によって、19世紀英国のガヴァネス小説という観点から Brontë の作品を考察、その新たな解釈の可能性を提示してみせたことで、本論文は今後の Brontë 研究に寄与するところきわめて大であると考えられる。ただし、たとえば、著者によるガヴァネス小説の定義には曖昧なところが残っており、また、Brontë の作品の細部の読みに詰めが足りない箇所がまま見受けられる。これらの問題点への取り組みは、今後の研究に期待したい。

以上をもって、本論文は奈良女子大学博士（文学）の学位論文に価するものと判断する。